

## ライフコース分科会 2023 年度活動報告

ライフコース分科会では、日本発達心理学会第 35 回大会において、ラウンドテーブル「20 世紀初頭に生まれたアメリカ人の 1 世紀にわたる人生：『大恐慌の子どもたち』の親世代のライフコース」を 2024 年 3 月 8 日に実施いたしました。発表抄録を次頁に掲載いたします。

2024 年 5 月 14 日

ライフコース分科会代表

岡林秀樹（明星大学）

# 20世紀初頭に生まれたアメリカ人の1世紀にわたる人生

『大恐慌の子どもたち』の親世代のライフコース

- 企 画： 日本発達心理学会ライフコース分科会  
司 会： 岡林 秀樹 明星大学  
話題提供者： 槻館 尚武 山梨英和大学  
話題提供者： 登張 真穂 文教大学生生活科学研究所  
話題提供者： 竹村 明子 仁愛大学  
話題提供者： 佐藤 央男<sup>#</sup> 筑波大学働く人への心理支援開発研究センター  
話題提供者： 松岡 弥玲 愛知学院大学

## [企画主旨]

グレン・H・エルダーたちが2021年に著した *Living on the edge: American generation's journey through the 20th century* を邦訳する機会を得た。1900年前後に生まれ、カリフォルニア州バークリーに移住してきた『大恐慌の子どもたち』(Elder, 1974)の親世代(以下、1900年世代とする)が20世紀を通して、どのようなライフコースを辿ったのかを紹介し、わが国における研究の発展可能性について考えたい。

**第2章 カリフォルニアへの移住(槻館尚武)**：1900年世代は、大きな社会経済的変動の中を生きてきた。彼らにとって、移住はチャンスを得るための手段であった。カリフォルニア州は、国内外から多くの人々を引き寄せたが、その6割強が移民であった。移住してきた人たちのルーツがどこであるかが彼らの人生を形成する上で大きな要因であった。1900年以降、カリフォルニア州の人口が急増した理由は、大勢の移民がカリフォルニアに定住し、子どもを作ったためである。外国生まれの移民の職業地位が低いとは限らず、英国・カナダ・北欧出身者ではホワイトカラーの割合も高く、職業的地位は出身国だけではなく、血縁にも影響されていた。人々を移住へと促した当時の自然災害や経済的発展の様子、家族・親族・同郷人たちとの関わりが当事者たちの回想記録を交えて、描写されている。

**第4章 女性たちの生き方(登張真穂)**：夫と子どもと共にバークリー研究に参加した1900年世代の女性たちの成人期初期までの人生を辿る。彼女たちはどのような教育を受け、どのような仕事をし、どのようにして結婚相手と出会ったのだろうか。4割近くはある程度の大学教育を受け、約半数は結婚や子どもを持つ前に有給の仕事を持っていたが、大学に通った女性の多くは結婚前後に仕事をやめ、夫の収入に頼るようになった。彼女たちの標準的願望は結婚と子育てだった。この時期、家庭は生産の場から消費の場へと変化し、家庭の規模が小さくなり、子育ての期間は短くなった。彼女たちの家庭への意識と理想、家庭外での活動、自らのアイデンティティ構成について、資料を基に検討する。

**第5章 1920年代の夫婦関係(竹村明子)**：1920年代は、産業化により夫が家庭から離れた職場で働き始めた時期から大恐慌前夜の時期にあたる。夫と妻の日常活動が離れていくにつれて、夫婦間で意見や経験を分かち合うことが、信頼や理解という共通基盤を育む上でますます重要になっていった。マクファーレンらが1930年代初頭に実施した調査を基に、社会の変化が夫婦に及ぼした影響をエルダーらが分析した結果、夫婦間の対話や価値観の共有、出自や出身地が、この時代のバークリーの夫婦の適応や親密さに大きな影響を及ぼしていたことが明らかとなった。

**第8章 苦難の時代の育児(佐藤央男)**：大恐慌下において、一家の収入が減ると、稼ぎ手であった夫が元々持っていた精神的な緊張が感情的な暴発を引き起こし、結婚生活が機能不全に陥り、子どもを持つという家族計画に負の影響が及んだ。子どもがいる家庭においては、年長の子ども、特に少年が家庭を支える役割を果たした。一方、少女は母親の適切な関わりによって自立し、自信を持って生活していた。このような傾向は、都市部に居住していた家族よりも、郊外に移住し農作業に携わっていた家族において顕著であった。

**第11章 働く女性たち(松岡弥玲)**：第二次世界大戦の戦時動員の間、男性が次々と徴兵され、その空席を埋めるように女性たちの就労機会が大幅に拡大した。この流れは、既婚女性の就労に対する根強い偏見を(一時的にはあるが)払拭し、女性の就労は社会に大いに受け入れられた。バークリーの女性たちが第二次世界大戦時の就労機会の拡大に、どう対応し、どう理解し、どう経験したのかについて、①社会階級および大恐慌時の経済的困窮経験の有無、②独身時代・大恐慌時代・第二次世界大戦時代の3つの時期での就労経験の差、③仕事の種類などを踏まえて考察する。